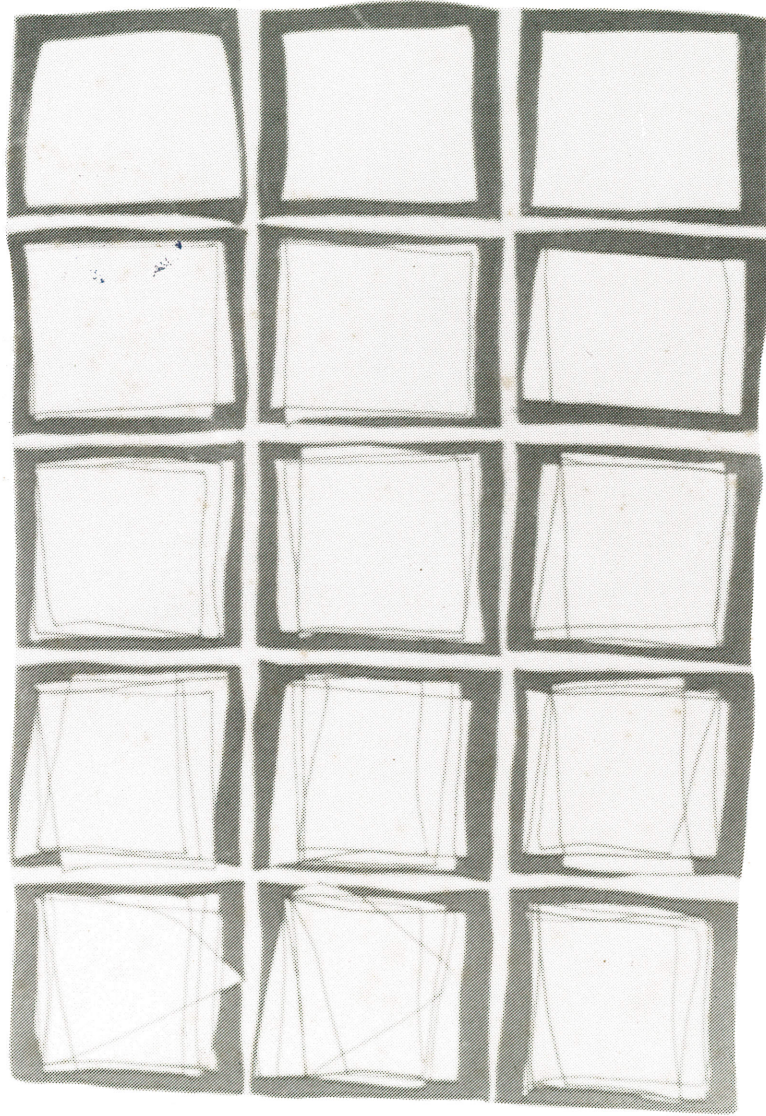


《人物探訪》第3回

金井淑子(長岡短大教員・フェミニズム)さんに聞く

『フェミニズムは男に何を
問いかけているか』



前衛

4月号 No.323

ボクモル

永山則夫に対する差戻し
審で死刑の判決が下された。
その一方で、九五歳の死刑
囚平沢貞通が二か月近くも
死線をさまよっている。企
業爆破事件の被告にも最高
裁で死刑が宣告された。死
刑判決の本当の理由は天皇
暗殺未遂の方にあると思っ
たが、どうだろうか▼こ
うした状況のもとで、死刑
の是非をめぐる論争が再燃している▼そ
の際つかされたことだが、死刑存続の
議論にはあまりに感情的なものが多い。
「死刑を廃止したら殺人などの凶悪犯が
ふえる」というのもその類だ。犯罪防止
という、一見法理的な衣をまとって
るだけに始末が悪い▼そもそも統計的に
は、刑罰の重さと犯罪の発生率との間に
明確な因果関係は存在しない。当り前だ
ろう。人を殺すような場合、速まった後
のことなど考える余裕のないのがふつう
だからだ▼だからといって、「計画的な殺
人」が防げるかというところでない。
なぜなら計画的な殺人というものは、「自
分は速まらない」という前提のもとにあ
れこれ「計画」するものだからだ。した
がって犯罪学者にいわせれば「死刑の存
在は犯罪の防止には役立たず、「犯人」達
の関心を隠蔽工作にむかわせ、犯罪を複

雑にするだけ」ということになる▼多分
主張している当人も自覚していないこと
だと思いが、殺人と死刑の関係の本質は
国家による「報復」の代行にある。犯罪
一般と刑罰の関係も同様だ。「犯罪防止」
とか「教育的配慮」などというのは、後
からつけられた口実にすぎない▼その証
拠が、冤罪事件の無罪判決のたびに出て
くる。「被害者や遺族の気持はどうかして
くれる」という大合唱だ。奇妙なことにそ
れは、「真犯人」や「真犯人を捕えられな
かった警察」にむけられるのではない。
無罪判決そのもの、あるいはそれで解放
された「被告」にむけられるのである。
「釈然としない」という遺族の談話が新
聞にのったりする。ようするに、「誰でも
いいから絞首刑になれば気分がスッキリ
する」ということなのではないのか▼刑
務所で「更生」するなんてことも、まず
ありえない。「反省」する人は、刑を受け
る前にすでに反省しているものだ。現実
の刑務所は「なぜ速まったかを反省し」
「より確実な手口に関する情報」を交換
するための「犯罪学校」と化している。
「初犯」だけを収容する刑務所があると
いうことは、法務当局自身がこの事実を
認めているからにはほかならない▼いずれ
にしる、死刑の存続や復活を要求する声
が大きいのは、大衆の不満が蓄積し、屈
折している社会共通の現象である。

新国家主義による生活と自治の破壊

売上税導入を契機に 中曾根政治への抵抗の拡大へ

海津隆志

京都・東京・名古屋を中心とする全国
の織物業者が東京で大会を開き、「織物消
費税の廃止」を決議した。商工会議者連
合会は次期選挙の候補者選定に際し、消
費税にたいする態度を考慮すると言明し
た。また新聞は「中層以下の国民生活に
たいする迫害を考慮しない虐政悪策」と



大正デモクラシーの先駆けとなった 八〇年前の「悪税反対運動」との類似

して増税案を非難した。野党も政府が前
国会での公約に違反していると指弾し、
及び腰ながら軍拡政策についても批判を
行なった。ただ財閥特権資本だけが「国
民の負担だけを増やすのではなく、民間
経済の発展に効果がある」として増税と
軍拡に賛意を表明した。

このように書いてくると、だれでも「最近
の売上税をめぐる動きのことだな」と思っ
たろう。だが、これは一九〇八年(明治四一年)
のいわゆる「悪税反対運動」の描写だ。一瞬
見まちがえるほど、状況はよく似ている。
戦前日本の天皇制国家はほぼ一〇年ごとに
侵略戦争を挑み、戦争をとおして膨張を続け
ていった。とくに日露戦争は支配層にとって
一種の「賭け」であり、またともかくにも
勝利したことによって軍部独裁・戦争国家へ
の基本コースを拓いたものであった。戦争中
巨額な軍事予算をまかなうため、明治政府は
重税政策を採用、そのひとつとして織物消費
税、通行税、塩専売などを施行した。
日露戦争後、織物業界をはじめ「非常特別
税」の改廃を求める声が高まったが、政友会
政府は、戦争国家を支えるため、三税を引き
続き課したばかりか、酒税の増税、石油消費
税の新設も行なった。最初に紹介した動き
はそうした重税政策への抵抗である。
明治末期に展開されたこの「悪税反対運動」
は単純に業者たちだけの関心事だったわけ
ではない。表層をすべて覆いつくすような軍国
主義の風潮の中で、底流にひそむ厭戦的・反
戦的な民衆の意識、あるいは天皇制国家の社
会を破壊する攻撃への抵抗心や民主主義的な
意識の成長、さらに大衆文化の芽ばえといっ
たことからの存在と深い所で結びついていた。
悪税反対運動はやがて開花する大正デモクラ

本号の誌面

ブラック・ホール	2
新国家主義による生活と自治の破壊	3
《人物探訪》 第三回 金井淑子さんに聞く 「フェミニズムは男に 何を問いかけているか」	7
『国鉄-JR物語』	12
『手遅れの時代における理論活動吉野作造 についての一試論』	13
書評「猫の大虐殺」	17
表紙のことば	19
表紙 空間工房	

シー運動のさきかけ、ある意味ではむしろその一翼をになうものであった。

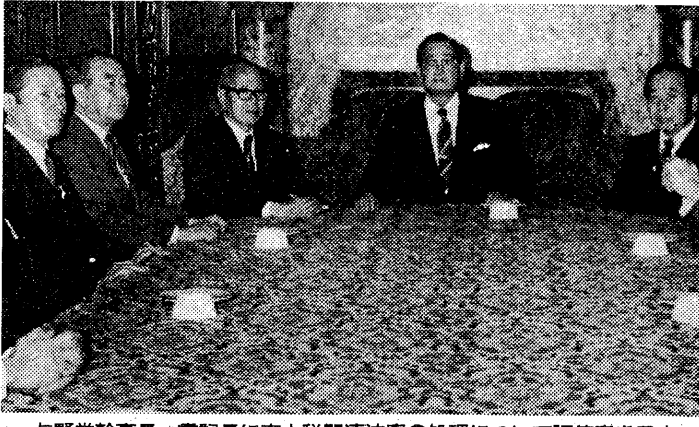
衛

中曾根首相はさかんに売上税に關するPR不足を強調する。つまり、売上税論議だけが先行し、税制改革の他の面が見られていない。前売上税自体も、売上高一億円以下の企業や福祉事業などについては適用から除外されている。だからトータルにみれば、とくに声なき声のサラリーマンにとって税負担は軽減されるはずなのに、その内容が十分に伝えられず反対論が強まっているのだ、と。

では果してそうだろうか。今回「シャープ以来」の改革と宣伝されている税制改革の前身は、売上税の新設、所得税（法人税）の税率構造の改革、そしてマル優制度の廃止が柱となっている。

まず問題の売上税についてみてみよう。売上税は、製造から流通（サービス）に至るまでの全ての取引行為にたいして、そこに生じた付加価値に課税するもので、基本的には最終消費者が価格の5%を負担する制度である。立派な大型間接税の引上げであり、物価全般を押し上げる影響も少なくない。だから税制の基本からすれば「消費者」が最も打撃を受けるわけである。消費者が最も打撃を受けるわけでも奇妙といえは奇妙だ。

政府がいまこうした税制を導入するのは、これまで直接税の比重が高すぎ、所得の再分配だけが重視された「悪平等」だったから、間接税の比率を高めなければならない（直間比率の是正）という考え方があり、さらにそ



与野党幹事長、書記長に売上税関連法案の処理について調停案を示す原案院議長（中央）
=23日午後9時20分、国会内で

高所得者層には二〇%から五〇%までの累進税率が課せられる仕組みだ。

「政策構想フォーラム」の試算が六三〇万円以下の中堅・低所得層では増税になると指適して大きな波紋を投げかけた。ただしこの試算はあくまで売上税新設による「増税額二兆九〇〇〇億円」という試算を前提にしている。実際の税負担はもっと増える可能性がある。

少なくとも単純に言えるのは、中堅所得層の中で従来所得税率一四%だった四五〇万円から五二〇万円（これはサラリーマン層の三割近くを占めるといふ）の世帯が、基本税率の適用で一五%に増税されること、さらに、最高税率を一挙に七〇%から五〇%に下げる

今日の売上税をめぐる動きはどうだろうか。

つまりは不公平な増税施策の導入と流通部門の大幅な選別・合理化へ

の背景には戦後もここまで来ると国民全体の所得が増加し、社会福祉制度も著しく充実してきた。「一億総中流化」の時代だから再分配機能よりも、負担は一律に課していくべきだ、という認識が横たわっている。社会の現状が本当にこのような判断でよいのか、という点は大いに検討されなければならない。もしそうでないとする、一律の負担化は、所得の低い方により強く打撃を与え、所得格差の拡大につながるからだ。

政府はこの点について、所得減税で面倒をみるので、とくにサラリーマンにとっては有利になるはずだとしている。果してそうなるかどうか、所得減税については後で別個にふらたい。

卸・小売業者が大声を上げて売上税に反対しているのは、税制からみれば、第二次的な（とはいえ各業界にとっては死活の）問題に關連している。

まずこの不況の時代に間接税を引上げても価格に転嫁すれば、消費者の防衛策は商品を買ひ控えることになると見ている。つまり「総中流化」といわれるほど国民に余裕があるわけではなく、売上税が購意欲の減退を招くという見方だ。

また、一億円以上の売上高をもつ企業と取引をした場合には、その企業が支払った税額を控除できるが、非課税業者はそれができない。それをそのまま価格に転嫁していけば、

ので本当の高所得者層が得る減税の絶対額が非常に大きなものとなること、の二点だ。

また、法人税は基本税率（現行四三・三%）を引き下げ、最終的に三七・五%に引き下げる方針だ（とりあえず上乗せ措置が切れたの四月から四二%にダウンする）。中曾根首相はこの法人税の引下げが勤労者の所得増加につながるから税制改革はプラスになるはずだと力説する。しかし、今日企業が減税分を賃金にまわすなどという保証はまず一〇〇%ない。最大限の人べらしと賃金抑制に躍起となっている企業の姿をみれば明白なことだろう。現に全労協の大手企業へのアンケート調査でも四割が還元しないと明言、わずかに一割の企業がそれも条件つきで賃金への還元を回答しているにすぎない。

税制改革のもうひとつの柱は、マル優の廃止と（郵貯非課税制度廃止にもなる）一律二〇%の利子分離課税の導入である。これは

これまでの論議であまりふれられていない売上税の政治的な性格について、われわれは眼を向けてみる必要がある。「公約違反」と批判されながら売上税導入を強行しようとした動きの中には「三〇〇議席のおごり」というだけでなく、中曾根政権の政治体質が深くかわっていると考えられるからだ。

最終消費者と直結する小生産や流通業界が売上税は不況下で購意欲を低下させるものとしてこれに強く反発しているのはすでに見たとおりである。彼らは従来おおむね保守党の基盤のひとつとなってきた。最近の自民党

とうぜん前者に比べて高くなっていくので、弱い立場の業者は、市場から排除されるか、損を承知でその分を負担するかを選択を迫られる。中曾根首相自身、テレビ放映で「流通業界の合理化（弱者の整理）」につながると思ふ」と明言している。

さらに、今回の売上税では、土地・株の売買や利子・保険料の収入、食料品、社会福祉關連など、五十一項目の非課税範囲が設定されているが、それがまた、あまいで公明さを欠く原因ともなっている。すでに新聞紙上などでも報道されているように幼稚園は非課税で保育園は課税、歌舞伎は非課税だが落語・演劇は課税、魚のカンヅメの身は非課税だがカンは課税といったわけのわからない話が多い。結局大蔵省や政治家との結びつき（癒着）で左右されるような暗部をつくり出しているのである。

各事業者が三カ月ごと、課税額を（二カ月以内）に税務署に収めるという事務手続き上の負担も反対理由のひとつになっている。ある試算では事務上の負担が納税額の三〇%にも達してしまうという「不条理さ」無用な負担の再分配機能を否定する税率構造

所得再分配機能を否定する税率構造 中堅以下の所得層にとって負担大に

税制改革の第二の問題は所得減税である。先にも述べたように、中曾根首相は、こちらが先行するのだから、売上税が実施されても負担は相殺されると強調してやまない。しかし政府や大蔵省の言うことには何ごともし身の検討が必要だ。

現在の所得税が最低税率一〇・五%から最高税率七〇%まで十五段階の細かな累進マル優の不正利用にたいする措置として行われるものであるが、現実に打撃を受ける度合からすれば中堅以下の所得層であろう。また分離課税の導入でこれまで課税対象になつていなかった利子も含め一律二〇%が源泉徴収される。この点でも高額貯蓄者にとって有利との試算が示されている（例えば、五%の利子で一億円の預金者の場合、従来だと課税貯蓄枠一四〇〇万円を限度まで使い、三五%の分離課税を選択すれば一五〇万五〇〇円の納税額であったものが、今回の一律課税では一〇〇万円ですむことになる）。

これらの諸点を総合してみると今回の売上税をはじめとする税制改革は、企業や高所得者にとっては現実の利益が大きい反面、中堅以下の層にとっては、重税感と不公平感を強めるものといわざるをえない。国家による社会と民衆への挑戦である。

地方自治をさらに破壊する売上税 中曾根流新国家主義の政治的狙い

の安定多数支配は、保守・農村、革新・都市といった五五年体制の支配構造を崩し、都市部において保守基盤を拡大してきたことよっている。そこに手をつけようとする中曾根政権の意図は、大平時代のそれとは異なっているのではないだろうか。

戦後政治史の中で中曾根首相は岸（信介）政治と同じ流れをくむと言われている。たしかに両者に共通項は少なくない。人脈としても岸・児玉菅夫・中曾根という結びつきは公然の事実であった。それだけではなく、岸・中曾根両政権とも「国際国家日本」を打ち出

担のための納税か）を指摘する。

ところで、このところが大切なポイントだが、この売上税の新説によって国家はどれだけの税収を上げることになるのだろうか。

大蔵省の公式の見積りでは約五兆八〇〇〇億円、物品税の廃止分を差引くと実増二兆九〇〇〇億円ということになっている。だが、実際には週刊誌上でも各省課長らが証言しているように、売上税の税収は八兆円にもほれるものと試算されているようだ。低く見積られているのは所得減税とのかね合いによるもので、実質増税はかなり大幅になるとみなければならぬ。たしかに増収になるのでなければ、これだけ大騒ぎしてまで取って強行するわけもないだろう。

しかも税はいったん創設されると着実に継続され税率・適用範囲も上昇・拡大する傾向をもつ。ちなみに、最初に記述した織物消費税は、非常時税だったはずのものが、なんと日露戦争から第二次大戦後のシャープ改革まで続いたという経過がある。間接税が大型になれば貧富の格差も拡大するだろう。

し、軍備の拡張とナショナリズムの高揚を唱えた。対米関係をとつてみても、岸・ニクソン、中曾根・レーガンという「盟約」はどこか似かよっている。そして、ニクソンやレーガンがエスタブリッシュメントではないのと同様、岸も中曾根も保守本流ではない。本流でない彼らが基盤を固め、地位を強化していくためには、アメリカや大手資本・高級官僚などの「良好な関係」をことさらに強調しつつ、従来空白だった部分、政治的に避けられてきた分野を、権力によってテコ入れしそれをバックに支配体制内部での力を強めるしかない。岸元首相は「日米安保の双務化（日米新時代）」を掲げた。それは国防総省との協力関係を強化し、アメリカの対アジア外交の一環として反共軍事政権への経済的なテコ入れをはかるとともに「賠償」を呼び水とする日本資本のアジア進出をプロモートしたものであった。反共政権との癒着といい、アジア進出といい、当時の政治状況では回避されがちな政策の選択をはかったわけである。

中曾根首相の「新保守主義」あるいは「新国家主義」とは何だろうか。

まず国際関係ではロン・ヤス盟約と称するアメリカとの独自の協調関係をみせつけつつ、対米輸出の維持とそれをひきかえにした兵器・農産物の輸入拡大をはかると、東京金融市場の膨張に対応した「国際情報センター都市・東京」の実現をめざすこと、いずれも経済的ナショナリズムの高まりをバックに、大國主義を鼓吹することが特徴となっている。もちろん、そうした構想と、現実に順調に進むかということは別個の問題である。国内政治の面で中曾根流新国家主義は「戦

後政治の総決算、路線をとってきた。彼の目標は「大統領的首相になり力強く政策を推進することである」という。その含意するところは、強力な軍隊、秩序だった行政・警察機構、一元化された大衆操作、そしてその頂上に立つ「大統領的首相」であろう。

中曽根政権誕生で一番活気づいたのが、旧内務官僚の復権を願う勢力と、保守本流と革新の蔭で冷飯食いだつたウルトラ国家主義の学者・ジャーナリストだという。戦後の保守体制は、自民党内の強力派閥と大蔵・通産・建設などの経済官僚と巨大独占の結合によって支配集団が形成され、それぞれの時代を主導してきた。それだけに、戦前軍部とともに支配の中枢に位置していた内務官僚グループの復権に力をつける執念は強い。とくに高度成長が終って以降、地方自治体の首長に（旧内務省出身を含む）自治省OBが大量進出してきたことはよく知られている事実だ。自治省・警察庁を中心に彼らが中曽根（昭和一六年入省）政権の国権主義的な総決算路線とタイアップして勢力伸長をはかろうとしているのもまた明らかだろう。

今回の売上税の新設が、その適用をめぐって新たな業界との癒着構造をもたらすことは確かであるが、同時に、その税収（売上譲与税を除いた額）の二〇％が自治省の裁量する地方交付税にあてられる事実にも、われわれは注目する必要がある。もはや「三割自治」どころか「二割自治」でしかないと嘆ずる声が自治体の内部からも上っているゆえんだ。もちろん、中曽根自治省OB旧内務官僚

で一括してしまうのは短絡すぎよう。現在の自治省出身者の首長は、中央官庁とのパイプと行政テクノクラットとしての力量を表面に押し出し、保守・中道相乗りの「非政治イデオロギー的」政治で支配している要素も強く、それは中曽根流政治とは必ずしも等号で結べない。しかし、金と情報の集中化の制度が連

昨年衆参同日選挙で自民党が三〇四議席を占めて大勝し、また国鉄解体攻撃にたいしてもついに労働組合などの抵抗らしい抵抗がみられなかった。こうした事態は、一〇年におよぶ長期不況と支配体制からの攻撃によって民衆の抵抗力が奪われ「寄らば大樹の蔭」式の大勢順応主義が広まっていることを示していた。

ところが売上税の動きが出てから以降、状況は変化しはじめた。三月の岩手県参院補欠選挙では、保守王国の、しかも実質上小選挙区型の一騎打ちという条件下にありながら、社会党候補が圧勝する結果をみた。その後の新聞社の世論調査でも、中曽根内閣の支持率が二四％（不支持率五四％）、自民党の支持率も四八％（前回昨年十二月では五五％）と大幅に低下していることが明らかになった。テーマ別にみると売上税（反対八二％）、防衛費GNP一〇％増撤去（反対六一％）などへの批判が目立つ。また内閣不支持の理由としては税制改革への批判とともに物価・景気政策への不満も大きい。

売上税を契機に広がる抵抗の芽ばえ 運動の連合と新しい分権・自治の理念を

スタグフレーション後、ここに来てはじめて政府や巨大資本の無人の野を行くような攻勢にたいし抵抗感のある動きが生まれたといつてよいだろう。「総決算の攻撃にたいし、在来型の運動が容易に歯ドメをかけられなかった中で、こうした動きが可能になった理由のひとつとして、卸・小売業者や流通業界が公然と反政府の意思表示を行なった点を見逃すわけにはいかない。いわば体制を支えてきた側の一部が反撃することによって、重圧感がとれ、民衆運動全体に活気を与えているのである。

卸・小売業者の（とくに中高年層）の発言をみてみると、たしかに売上税のもたらす経済的不利益を理由とする反対論が多いが、同時に「このままでは自民党はやりたい放題のことをするのはないか」「これ以上の軍拡は危険だ」「戦前型の社会に戻ってしまうのではなか」「総決算」にかかわる反対論や危機感が底流にあることがわかる。

むことは、戦前の任命制知事への接近（戦後の総決算の一環）の条件をつくることにつながるのも確かである。

売上税導入を起点とする新しい中央集権化への試み、これまた、社会と民衆の主体性にたいする挑戦にほかならない。

ひとつの問題は運動の連合にかかわるものである。明治末期の悪税反対運動では、当時の労働運動や反体制派との連携はほとんど成立しなかった。社会主義者の中には最初から「茶番劇」の争いだとみなす傾向さえあった。八〇年経つた今日においても「連合」は難しいことも知れない。戦後体制ができて以来初めてのケースであるからだ。市民運動・住民運動の取り組み方とその占める位置がとりわけ重要ではないだろうか。

問われているもうひとつの問題は、新国家主義路線とのせめぎ合いの中で「分権化」と真の「自治」の理念を大きく育てていけるか、という点である。中曽根流の新しい中央集権主義の狙いをもった売上税導入が、皮肉にも中央政治とは一線を画さなければやっていけないという風潮を、伝統的保守層にまで広げる状況へ進行するならば、条件は整うだろう。戦後の民主主義ははじめて国家主義との対比において民衆側に根づくことになる。しかもそれは五五年体制の「民主主義」ではなく、集権と管理に真正面から対置される分権と自治の実現をめざす、より直接の民主主義として発展させられていくにちがいない。

主体としての女性

金井 まあ、いいわ。今回かぎり。特例ということだね。私はあくまでも「市民派」という立場に徹して臨む、ということだ。

深川 ありがとうございます。

金井 でも、何か話したらいいのかしら。私って、どうも同じ話をくり返してきるといふタイプじゃないのよ。シャイなのかな？ それに党派の人や学問的にも党派性の強い人に、いままら、フェミニズムを云々かんかんしてもって、感じの方が強いからね。

権力とか国家、つまり支配の概念ひとつとってみたら、いまフェミニズムが権力へのフェミニズム実践という立て方で問題にしていることと全然違うわけね。暴力装置としての権力という次元に対して、イデオロギー装置としての象徴論構造の問題をフェミニズムはもっぱら問題化しようとしているんですものね。党派を脱構築しちやえらような新しい社会運動としてのフェミニズムを、現実的につくり出すしきやないんじゃない？

深川 それだからこそ、やっぱり党派にもつとモノを言ってもらわないと。このかんのフェミニズムの論争をちよつとさらってみることから始めますとね。一つは、「上野千鶴子・青木やよひ論争」で出てきた問題がありますね。論争自体としては「子供を産む性」という「男との違い」をもって女性を規定し、それを女性解放論の出発点にすえようとした青木さんが論破された形になるわけですね。「女性性」を「実体化」したと批判されて、簡単にいえば「男と女は違うんだ」という

《人物探訪》 第3回

金井淑子(長岡短大教員・フェミニズム)さんに聞く



金井淑子(かない・よしこ) 1944年生まれ。長岡短期大学教員。倫理学。「季刊クライシス」編集委員。著書に『転機に立つフェミニズム』(毎日新聞社)ほか。

『フェミニズムは男に何を問いかけているか』

インタビューー 深川克己

金井 この間は電話でウツカリOKと叫びやうただけで、あとよく考えたらお宅のどこ「党派」なのよ。(笑)

私、日頃党派とは一線を画すことにしています。今回の選挙の推せん人なんかも断つてきたの。一つ引受けておいて他を断るといふのもなんだし、無制限にズルズルと関わらざるをえなくなるというのも非主体的な気がして。だから、今になってなんだけど、どうしようか考えてるとこのな。

深川 いや正直な話、あまりアツサリ引受けてもらえなくて驚いてたんです。(笑)

でも、ウチは「党派」といっても、ふつうのアレとはちよつと違ふんですよ。『稲妻』の村岡君からは「解散した」っていわれているくらいだし。(笑) ま、実際、組織とかこの『前衛』のあり方も変えようと考えている最中なんです。名称の変更もふくめてね。

「人物探訪」のシリーズも、そういう試みの一環でもあるんです。広く外部の人の意見も誌面に反映させていこうということだ。

それに、これは本日のインタビューの内容にも関わることなんです。フェミニストはもつと党派に積極的にモノをいうべきじゃないか。というのは、これは三年前の橋大での金井さんの講演を聞いて僕なりに感じたことなんです。フェミニズムは「男」とマルクス主義の両方を相対化できる論理というか、力をもっていると思うんですね。

——というやうなやりとりがしばらくつづいたのち——

8] 通俗的な価値観の批判が不徹底で、差別をなくす論理としては不十分だ、ということなんじゃないか。

ただね、上野さんの批判は当たっている点があると思うんだけど、それだけでは、いわゆる「差異」が「同一性」に解消されてしまっているんじゃないか。これも金井さんに教えてもらった話ですが、「婦人解放運動」の時代の論理に、ヘタをすれば逆戻りしてしまうことになりはしないか、という気がします。

金井 女性を「男並みの権利を保障されていない第二級の市民」とみて、「男並みの権利を要求する」という論理ね。

深川 ええ、男とは区別された女性としての主体性をどう設定するか、という問題です。

なぜフェミニズムなのか

「レビュー」(二橋大「ジェンダー研究会」機関誌)の序文の短文に書いたことがあるんですけど、つまりそれは、広義の意味でのフェミニズム(女性の差別・抑圧からの解放をめざす思想と行動)にも、三つの水準があると。第一は、いわゆる女権拡張論の水準で婦人論レヴェル。第二は、ウーマン・リブをへて登場するいわゆる「女性論」の段階。この中も多義的だっけ、つき言いましたよね。そして第三がここ八〇年代に入ってきたフェミニズム論争にみられる水準。私はそれを、女性問題に関する婦人論・女性論・フェミニズムというふうに区分して問題を考えているんです。

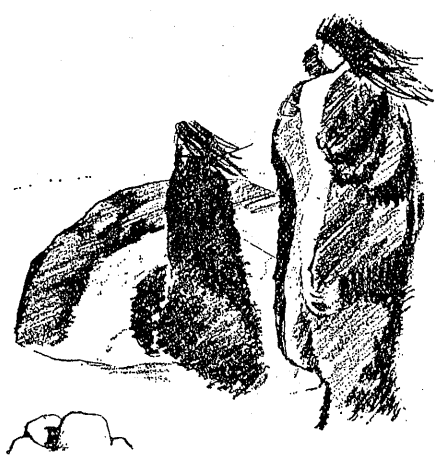
女性学は、女性問題の婦人論レヴェルへの一線を画することはできたけれども、婦人論は法律・制度の立ち遅れに女性問題の背景を

その点でいえば、金井さんの立場からは答えにくいことかもしれないが、「クライシス」20号での山本悦子さんの高群逸枝批判も問題があるんじゃないですか。まず「全米定」というのが気になります。その点では「新日本文学」1月号の「産湯と一諸に赤子を流すよつだ」という高良留美子さんの批判も当てはまらないと思う。ただ、山下さんの見解即「クライシス」全体のそれ、ととられると困るでしょうけど。

いづれにしろ——高群が自らかたてた「母性原理」を回路として天皇制にからめとられていく——という山下さんの指摘に説得力はあるんですが、それではまだ、話は半分だけという気がします。

「レビュー」(二橋大「ジェンダー研究会」機関誌)の序文の短文に書いたことがあるんですけど、つまりそれは、広義の意味でのフェミニズム(女性の差別・抑圧からの解放をめざす思想と行動)にも、三つの水準があると。第一は、いわゆる女権拡張論の水準で婦人論レヴェル。第二は、ウーマン・リブをへて登場するいわゆる「女性論」の段階。この中も多義的だっけ、つき言いましたよね。そして第三がここ八〇年代に入ってきたフェミニズム論争にみられる水準。私はそれを、女性問題に関する婦人論・女性論・フェミニズムというふうに区分して問題を考えているんです。

女性学は、女性問題の婦人論レヴェルへの一線を画することはできたけれども、婦人論は法律・制度の立ち遅れに女性問題の背景を



見、女性論は、近代の性別役割分業システムにそれを見ている。それに対して八〇年代のフェミニズムの議論は、何らかの形で女性問題を「近代」批判のコンテクストと関わらせて問題化せざるをえないことを明らかにしている。

深川 僕は以前金井さんの話をうかがって、「フェミニズム」というものといわゆる「現代思想」との、パラレルなというか、共通した位相を感じたんですが。

金井 そう、「近代批判」という点でそうかも知れない。男というものを近代を象徴するものとしてみた場合、そういえるかもしれない。私自身は、イリッチの「ジェンダー」(1)にしても、そういう意味で彼の元の意味とはズラしながら使えるし、使おうと思ってるのよ。もつともそこで、宇義通り近代を超えようとする者と長谷川三千子(2)さんのように、前近代に回帰しようとする立場への分岐があらわれるわけだけれども。

深川 そうですか。僕は金井さんの一橋大でのお話をつぎのように理解したんです。

つまり、女性解放運動の歴史でいえば、まず「婦人解放論」の段階がある。先程からの「男並みの権利」を要求する運動ですね。

金井 男第一級の市民という近代的存在に一步でも近づこうとするわけね。

深川 ええ、だから男も超えられないし、近代的な自由・平等概念も超えることができない。で、「リブ」という第二段階がある。一九六〇年代後半からですね。ここでは「第二の男」になるんじゃないかと、女としての独自の主体性をふまえていこうということになる。

金井 ちよつと待って。私がさっき話につなげて言うと、第二段階は「女性論」的立場ではたしかに運動的にリブが先行してあるのだけれど、リブの思想的な積極的な側面はむしろ、第三段階のフェミニズムの中に引き入れられていると考えたいんです。

深川 というのはね、男でしかもマルクス主義をやってきた者からいうと、リブとフェミニズムの間には大きな飛躍があるようにみえるんですよ。つまり、リブは自前の立脚点という運動論を発見して「男社会」に猛烈な切り込みをかけた。その衝撃力はすごくて、みんなタジタジとなった。僕なんかもここで、相当影響を受けているわけです。

ところが、七〇年代もなかばを過ぎると、こいつちやなんですが、何か妙におとなしくなってきた。僕の周囲でも、男達の差別的な言動をかつてほど問題にしなくなったようにみえる。一つには、男達が開き直りを覚えたということもあると思うんですけどね。社会の情勢も変化して、厳しい糾弾をや

りにくくなってきたということもあるかもしれない。その意味では男の責任が大きいとは思わう。

いづれにしろ、彼女達は言葉が発することを通して感じはじめたんじゃないか。借越な言い方ですけど、「言葉が失った」というふうなみえた。『女・エロス』(社会評論社)の廃刊はその象徴的なできごとじゃないでしょうか。

ところで、去年「民衆文化運動フォーラム」というのがありましたよね。

金井 新日本文学会主催のね。

深川 ええ。その「女性分科会」で「男が居るのはケシカラン」みたいな発言があったんですけど、僕は意地が悪いものだから、「ああ、相手が関野さんや中村陽一さんだからそんなことをいったんだな」と思ってたんですよ。つまり、世間一般の男にはそんなこと絶対にいわない。というか、そもそも口をきく気もしないでしょう。それなりに「話の通じる相手」だと思っただけから、ああいう「つきつけ」も出てきたんだと思います。

だから、またまた借越な言い方になります。リブの段階では「わかる人にしかかわからない」論理にとどまっていたんじゃないか。「開き直られたらお手上げ」みたいなことがあったんじゃないですか。

その点、フェミニズムは「女とは何か」と同時に「男とは何か」を問おうとする。

金井 男をも「脱構築」(3)してしまおうとするわけね。

深川 しかも、現状分析を「資本主義的階級関係」経済学だけでなく、たとえば上野千鶴子さんのように「家事労働」との二本立てでやろうとする。マルクス主義も脱構築され

てしまっわけですよ。

金井 だから、そういう意味ではポスト・フェミニズムというべきかもしれない。

深川 だから「クライシス」28号の座談会における深江誠子さんのように、ただ「難しい言葉を使うな」じゃ困るんですよ。概念装置そのものが変わっているんだから。深江さんのように「おのれの間にこだわる」と宣言できるのも、「すべての間に一様に責任をもとうとする」とは「ない」という、多元論的な了解が前提にあるからだと思うんです。これまでの運動の考え方は、とついでに許されないと、出て来ようもない発想でしょう。

ついでにいえば、やはり「新日文」の1月号に「日本にはフアロクラシー(4)は存在しない」という発言がありますが、これも一面的ですよ。問題の発端は、「階級関係だけでは性差別問題はとらえきれない」というところ

「お手伝いさんを雇うというのはねえ……」

深川 女と男を「関係性」としてとらえるという視点に立つと、性差別が男をもミジメにしていることがよくわかりますね。「新日文」の4月号でまたフェミニズムを特集しているんですが、その中の「日本の近代文学を読み直そう」という座談会で、女流作家と「つれあい」の話が出てきます。だいたい男の方は「一人前に稼いでこない」というコンプレックスにさいなまれていて、しかも社会的評価も女の方が高い、男としては立つ瀬がないという話なんです。(笑)

金井 それは、貴方が「稼ぐ」という意味ではダメだとしても、政治活動の側で自負心を

にあり、そこでフアロクラシーという分析のもう一方の極をたてたわけですからね。それに代る別な極をたてるか、それとも「階級関係」に性差別問題を還元する従来の立場に戻るか、そこをまずハッキリしてもらわないと。

それに、たしかに日本にはヨーロッパ的な形での家長制の伝統は存在しなかったわけですが、明治維新以降にそれが輸入された事実が見落されている。戸籍制度が入って戸長という存在が制度化されるとかね。

金井 それとの関連で天皇制も論じられるべきなのよ。

深川 「明治以降の天皇制は日本型近代遂行のために輸入された装置だ」という意見もあることですよ。

金井 それを受入れる前提としての日本的土壌はみておく必要はあるけれどもね。

もっている、ということがあるのよ。深川 でもね、今時政治活動をやっていていうだけで自負心をもてるということはまずないでしょう。自己満足してるなら別だけども、つくづく「何の意味があるのかな」と思っちゃう。(笑)

金井 そういう言い方もないため、私なんかこの十数年間というものの仕事と子育てで追いつまわられて、状況との切り結びというか、政治的な意志表現ではつねに第二バイオリンという感じで、すごいフラストレーションがつきしているのね。ここ二、三年にわかに職場以外の場面でも少し動き始めたんですけ

ど。だけど仕事で、週三日家をあけることが多くて、それで帰ってくるでしょ。そうするとドアを開けたとたん、もう、家の中がしつちやかめっちゃか、こーんなになつてくるわけよ。(笑) 私って、そういうの耐えられないのよ。

そしたらね、私ビクビクしたんだけど、私の知ってる人がよ、つまりふだんフェミニズムについて論じている人がね、「お手伝いさんを雇ったら」と真顔でいうわけ。その人にとってはそういう解決・処理のしかたはごく自然なね。家事のエキスパートの方と仕事を分業し合うということね。

でも、どうも私には、そうすんなりという解決策がとれないのね。ものすごくこだわっている。そこをずつついていくと、最近ようやく分ってきたのは、その抵抗感というのは、どうやらいわゆる「対幻想」に関係しているらしいこと、なのね。もちろん、お金で他人にやらせることへの抵抗感もあるわけだけ。

深川 というところ?

金井 たえば、小島信夫の「抱擁家族」って小説があるでしょ。あそこではやはり「お手伝いさん」を入れることによって、家族の関係の心理に何かしらの変化が生じる。主人公の大学教授はそれを「この家にお手伝いの〇〇子がきてから流れ始めた」というコトバで表現している。その感じが、よく分るよな気がする。こだわっている根っこは共通しているんじゃないかと。

深川 やはり「新日文」の4月号の座談会で似たような話が出てきます。女流作家にとつての家事の話なんですけど、やっぱりどうし

でも低くみてしまおうところがある、あるいは家事労働をする「お手伝いさん」を自分より低い存在とみなしてしまおうところがあるというんです。『家事のエキスパート』と『女性のエキスパート』の共存みたいな工合にいくのかどうか。

金井 とにかくラクにはなるだろうけど。深川 御亭主というか旦那さんというか、金井さんの言葉でいえば、つれあいの方はどうなんですか。

金井 いちおうすべてファイティン・ファイティンという姿勢はありますけど。ただ基本的に「家の中がてんやわんやになっていて構わない」というところがあって、その辺で見解が分れるのと、「子供の教育上問題がある」というきわめて原則主義的な考え方です。

金井 それは彼も、党派をやってきた人なのね。それが収入のある仕事についてね。だけど、ダブル・インカム（二重収入）の威力ですごいわよ。週に二・三回のパートの「お手伝いさん」ぐらいなら入れることが経済的に不可能じゃなくなつて、今言つた選択が急に現実の問題になつてきた。「ああ、私も、近代」のはしっこに引つかりつつあるのかなあ」なんてふと思つたりして。(笑)

深川 なんだか泣けてくるような話だなあ。(笑)「お手伝いさん」って、別にモダンな存在じゃない。一九五〇年代頃まではそんなに珍らしい存在じゃなかったわけですよ。金井 そうなの、育ち方の問題もあるかもしれない。私はそういうのは無縁な家庭だったけど、私に「お手伝いさん」を雇つたらと勧めてくれた人は多分、関西の中流家庭の出

身はずだから。「近代」をどこで手に入れたか、というのが、この場合のこだわり方の違

「政治活動だつて他愛ない……」

深川 家事といえね、僕は独身だからやむをえずやっている面があるわけですよ。しかも食事と洗濯以外は完全に手抜きだから、部屋の中はてんやわんやなものでいいやない。(笑) だから、おそらく別な意味で「主たる活動」と家事のシレンマは感じますね。

金井 やっぱりあなたにとって家事は必要悪なわけですよ。深川 「てんやわんや」はまったく気にならない性格だし。(笑) ただ、ふと思つたんですよ。口を開けば、「環境破壊反対」とか「日本人は働きすぎだ」とかい、そう書いてもいるのに、現実の生活はなんだろうってね。添化物まみれの「ほかほか弁当」を食べ、朝から晩まで「活動」と称して駆けまわっている。こんなんでいいのか、と。

金井 そういえば、ウチのつれあひも、今はそうでもないけど、前は週に五日も十二時すぎに帰ってくるが多かった。そこでワザと「そんなに遅くまで何をやってるの」とか「何か成果はあるの」とか市民派になり下つた気楽さでいやらしく聞くんだけれど、そういう時は絶対にももいわないのよ。(笑)

深川 たぶん会議ですよ。金井 どうもそうらしい。そこでまた「少しはふえるの」とか聞くと、やはり黙つている。(笑) 深川 とても他人事には思えない。(笑)

カップルができて「困り込まれてしまった」わけです。その後、消費者運動とかを別個に始める人は出てきたけど、組織活動に「復帰」した例はまずないですね。

「フェミニズムは言葉を再発見した」

深川 それから、これはどうしても聞きたかつたことなんです。一昨年の「社会主義理論フォーラム」での降旗(節雄)氏の「ファロクラシー発言」があつたでしょう。「フェミニズムは言葉が難しくわからない」とか、「ファロス(男根)で支配した覚えはない」とかの。アレをなんで放置してるかわからない。別に降旗さんに個人的にうらみがあるわけではないんです。

金井 貴方、前からよくそれをいうんだけど、私達にしてみれば「もう、いい」って感じなのよ。それこそ長谷川三千子さんみたいに、何か一つの高みに立って、上の方から私達を見おろしながら話をされている感じがして、話を通じないって気がするわけ。

深川 そうかな。ただ、僕のフェミニズムにたいする思い入れからいうと、それじゃ困るんですよ。ま、僕の方の勝手な都合だといつてしまえばそれまでですが。

いなのかもね。

金井 活動自体が何かサラリーマン化してるのよ。

深川 ワーカーズ・ホリック(働き病)という意味で？

金井 それもあるけど……。深川 随性化しているということもある。何のためにガンバってるのか、考えられなくなつちゃうんですよ。

金井 でも、それで何十年もやってきたんだから、もし「やめろ」といふたら「死ぬ」ということと同じでしょ。そう思つて、それだけはいわれないようにしてるんだけど。貴方だつてそうじゃないの。

深川 ええ、いまさらツブシはきかないし。(笑) 金井 それもあるのよ、たぶん。いままでやめた人はいないっていろいろいつてきたわけですよ。その手前、というか意地というか。深川 だから、運動が落ち目になると、かえつて活動に執着することにもなる。情勢把握の誤りとか路線転換の問題としてとらえられないから、その不備を「日常活動」の絶対量で補おうとする。

金井 ホントに、一時ずいぶん疲れてた感じよ。深川 ちょっと活動の方の手を抜けばいいのにね。

金井 そこも「サラリーマン化」してると感じる点もあるのよ。一時ほど無茶な活動を、

みるべきなんです。じつは、あの後僕は降旗さんと何度か話をして、そのことを確かめてるんです。彼の口からポロツとその「本音」が出ちゃつた。やはり、僕が男でマルクス主義者だという「安心感」があつていつたのかもしれないんで、何か告げ口をするみたいな気もしないではないんですが。(笑)

「男組織」の脱構築を!

深川 何かベトナム反戦の頃の議論を思い出しまして。「軍需工場の労働者はどうすべきか」なんてね「やめろ」というのが一番話は簡単なんだけど、やめられるとじつは困るんですよ。より問題意識に乏しい労働力に取換えられるだけだから。兵器を作りながらでもいいから職場にとどまつて、サボタージュと

しなくなつた、ということでもあるんだけど。それに、そういう貴方だつて家事みたいな「たわいないこと」に関わりあうことは避けたい、つていう気はあるわけですよ。

深川 僕はモノグサですから。でも、「政治活動」の方も実態は、たわいないっていえばたわいないですよ。(笑) 逆にいうと、そんなに全力を挙げてうち込むのがいいのかどうか。「二四時間党生活」みたいなのがむしろ異常なんじゃないか。その意味で、「たわいないこと」にかかぎりあわざるをえないということとは、「政治一色」の生活を反省する契機のような気がするんですよ。

金井 なるほど、そうもいえるわね。深川 どうせ今時、四六時中やらなければおつつかない活動なんかありませんよ。もし、そうやってる人がいるとしたら、どつつか間違つてるか、ムダがあるかどつちかです。

金井 そうね、そこが不思議なのよ。ウチのをみてるよね、組織のみんなが生活の場をはずした政治の領域でだけ関わりあつて、いるよな気がするのよ。しかも、その関わり方は無制限で全面的でしょ。そのぶん、生活や家庭にシワ寄せがいけないわけがない。だれかが犠牲を全面的に負つてるとか。ところが、そういう関係は見てこないのよ。

深川 学生運動時代からの僕の経験でいうと、だいたいみんな活動家どうして結婚するわけですよ。そして女性が働いて男を食わせ、男の方が活動に専念するという分業のスタイルになる。何年かたつとかならず問題が起こりますね。生活上の不満も出てくるし、意識のギャップも生まれてくる。

金井 みんなおんなじね。男だけの世界になんてですよ。ふつうは、どうしても、合理化Ⅱ生産力の発展肯定の逃げ道を用意したがるものなんです。だから、会話不能ということは絶対にないと思つただけ。

金井 でもね、自分でやるという気にはどうしてもね。

深川 それじゃ、降旗さんはいいとして、長谷川三千子さんはどうします？

金井 いろんな人が批判したり論争したりしてるけど、ノレンに腕押しみたいなところがあつて。深川 みんな一対一的に対応してるというか、ムキになつて長谷川さんの論点を否定しようとしすぎるんじゃないですか。西欧Ⅱ近代、天皇Ⅱ反近代という図式のインキキさをつけばいいんですよ。さつきもいつたように、「天皇制」は西欧型近代の、日本における輸入形態なんですから。

金井 そうね、現代思想の視点から天皇制批判ということ、もう一度問題を立直してみるのが必要があるかもね。

金井 ま、それはね。仕事をもちつていのは何らかの意味で体制を支えていることになるわけだから。でも、そこから先が難しいのよ。深川 僕は、金井さんのいうシングル・インユー(一つの課題)をもつというか、おのれの間にこだわるというか、そういうことが鍵だと思つてますよ。何か「本業」以外にやるということね。それが「からめとられない」部分を残し、次の手がかりになるといふ気が



「手遅れ」の時代における理論活動に ついでの一試論

多元主義の実践と理論

坂内 仁

もはや手遅れである

『季刊クライシス』の天皇制特集の増刊号(昨年春)に、田川建三と加納実紀代の対談が掲載された。
加納は例によって正攻法である。中曽根政権のもとでの反動攻勢の激化を糾弾し、新国家主義の台頭への警鐘を乱打する。「このままでは大変なことになる」「なんとかしなくては」というわけである。
一方、これにたいする田川の対応が変わっ

〔12〕
金井 今日はいろいろと「位置づけ」してもらって。(笑)

深川 いや、いままで金井さんに教えてもらったことを、僕なりに復習してみたということとです。「同じ話はくり返したくない」ということなので、僕の方で代って「なぞって」みる必要もあつたということもあるんですが、それにしても、きょうは普段聞けない話もつかうことができました。ウチの組織も金井さんの「御亭主」の組織の方も、けっこう

《国鉄→JR物語》

職場には残れたものの……

狭川 与一



「娘が受験期なものですから、私の配属が清算事業団へ決定したということ、未だ家族に報告しておりません」——上野支部分会長会議が、静粛になる中で、乗り遅れた民同の一幹部があいさつする。「学校」派閥主義の中で対立していた革同の幹部たちも、拍手を送り握手を求める。「闘いの成果として雇用を確保することができたのか、希望退職などの客観的状況がそのようにさせたのか、ということを中間総括しなければならぬのではないのか」と、協会の活動家が紋切り型の問題提起をする。革同の活動家を集めた地区の学習会では、「活動家を狙い打ちにした配属の前倒しが現実に行われている。これを拒否したら、どうなるのか。通勤可能な時間の判断を地方本部は、当局は、どのような基準でみているのか。」交渉単位、専従問題は……? 「現場の定員は、六一年十一月のダイヤ改正時点でのよいのか」 etc.

「娘が受験期なものですから、私の配属が清算事業団へ決定したということ、未だ家族に報告しておりません」——上野支部分会長会議が、静粛になる中で、乗り遅れた民同の一幹部があいさつする。「学校」派閥主義の中で対立していた革同の幹部たちも、拍手を送り握手を求める。「闘いの成果として雇用を確保することができたのか、希望退職などの客観的状況がそのようにさせたのか、ということを中間総括しなければならぬのではないのか」と、協会の活動家が紋切り型の問題提起をする。革同の活動家を集めた地区の学習会では、「活動家を狙い打ちにした配属の前倒しが現実に行われている。これを拒否したら、どうなるのか。通勤可能な時間の判断を地方本部は、当局は、どのような基準でみているのか。」交渉単位、専従問題は……? 「現場の定員は、六一年十一月のダイヤ改正時点でのよいのか」 etc.

「娘が受験期なものですから、私の配属が清算事業団へ決定したということ、未だ家族に報告しておりません」——上野支部分会長会議が、静粛になる中で、乗り遅れた民同の一幹部があいさつする。「学校」派閥主義の中で対立していた革同の幹部たちも、拍手を送り握手を求める。「闘いの成果として雇用を確保することができたのか、希望退職などの客観的状況がそのようにさせたのか、ということを中間総括しなければならぬのではないのか」と、協会の活動家が紋切り型の問題提起をする。革同の活動家を集めた地区の学習会では、「活動家を狙い打ちにした配属の前倒しが現実に行われている。これを拒否したら、どうなるのか。通勤可能な時間の判断を地方本部は、当局は、どのような基準でみているのか。」交渉単位、専従問題は……? 「現場の定員は、六一年十一月のダイヤ改正時点でのよいのか」 etc.

てわけじゃねえんだから、そのツケはこれから回ってくるよ」
採用通知・配属決定で、一時の明るさが職場に戻りつつある。その中へ希望退職したF君が顔を見せた。「辞めるんじゃないか。手取りはふえたけど、休みとかが不規則なんで、また職探しですよ。」彼を囲んでの井戸端会議の途中、日頃影の薄いGさんが割り込んだ。

「一生、ポツポツ屋(鉄道員のこと)だけで通すなんてのは、昔前のことかもね。民間の人だって、結構転職している人が多いんじゃないの。」
その場がちよつと静かになったのは、「十六万人体制」云々に敏感になっている職場のエア・ポケットをGさんのことがえぐったからではないのか。我々の雇用が世間相場並み

になったことを、一人ひとりが感じているからではないのか、と思われてならない。
「はい。これで今日の仕事は終了。だって俺は、職員として不適当だから本務をはずされたんだろ。本当なら、こんな仕事をさせることの方が不当なんだよ。」お昼で店じまいをし、仕事道具を放り投げたベテランのHさん。「国労は相手を批判し議論はするけど、首を

切れノなどという汚れたことばは、一言も口にしていないぞ。」というのが、酒の席での彼の決り文句だった。
四月一日を目前にし、就業規則違反とされている国労バッジをはずすのか、JRバッジを着用するのか。こんな身近な問題に対する意志統一の職場集會さえない。おそらく生易しい対応ではすまないだろうに。

もめるんじゃないですかね、パニックになりして。(笑)
いずれにしろ、組織や運動のあり方を考えていくために、ずいぶん貴重な示唆がいただけたと思います。どうもありがとうございませした。

関係にあつたとする。生産の場と家庭が分離した近代になって、女性がかえってその位置を失い、男性一般にたいして従属するようになったのである。中世の再評価をもって近代を相対化しようとするイリツチの方法は、エコロジヤやフェミニズムに大きな影響を与えた。
(2) 埼玉大学助教授。右にみたようなイリツチの考え方を悪用。西欧近代、日本的なもの「反近代」という図式のもとに、天皇制をはじめ体制擁護の議論を精神的に展開中。男女の平等化は日本的な伝統を破壊すると主張して、フェミニスト達に迷惑をかけた。

た。
(3) 「男根支配制」とも訳すべきか。ファロス男根)に象徴される男中心の社会秩序およびその意識をいう。
(4) 西欧の哲学の伝統および社会原理を一元論的な論理中心主義とみて、その一元的な中心をすらしながら多元的なものにつくり変えてしまおうとする態度。
* この注は編集局の責任でつけたものです。

【書評】



「猫の大虐殺」

ロバート・ダントン著

海保真夫 共訳
鷲見洋一

岩波書店 3800円

パリの印刷工はなぜ猫を虐殺したのか

大革命以前のフランス、つまり旧制度下のフランスには、産業労働者も産業ブルジョアも存在してはいなかった。

それでは、あの大革命とそれを導く啓蒙思想の担い手は誰であったのか。それは工場をもつブルジョア階級ではなく、「ブルジョア式料理」を生活に定着させている種類の人々であった。

この唐突な定義にわれわれは少なからず面食う。もっと丁寧にいえば、一八世紀のフランスは農業革命も産業革命もまだ経過しておらず、経済的近代性は非常に薄いものであった、それにもない進歩的階層というものも存在を怪しまざるをえなかった、というわけである。

つまり、生活文化や思想的には「ブルジョア」的な階層は生まれてはいたが、それは貴族や僧侶といった伝統的エリートの中間階級化と職人の親方や医師、法律家、金利生活者等の旧中間階級が文化的・思想的に均質な階層として存在し始めたということにすぎなかった。あるいは彼らが社会的なリーダーシップをもち始めたということであった。

著者はロバート・ダントンというニューオーリンズ生まれの四三才の歴史学者である。彼のこの著作で一八世紀前半—つまり旧制度下のフランスに生きた人々を人類学的手法で分析し、歴史のなかに位置付け直そうとした。

「人類学的手法」というのは、歴史における「進歩」の概念、あるいは近代的価値意識による時系列の組み立てを排除し、ダントンの言葉を借りるなら、歴史における「他者性」にたちむかうということである。

この著作によれば、旧制度下の農民は「偽り」を美德とし、「人食い」の話を好み、幼児を虐待する。おなじく労働者は猫の大量虐殺を行ない、労働を嫌悪する。こうした事象は何を意味しているのか。ダントンはこうした事象のもつ「不透明さ」のなかに、他者の象徴的世界を読み解いていくのである。

歴史学というものは資料・データなどを積み重ねることによって成立してきた。しかしその資料・データ自身のなかにひそむ「象徴性」—つまり資料・データというものの存在のしかたの解説に焦点をあてて、より具体的に近づくこととする姿勢がダントンに「人類学的手法」をとらせているのである。

ここでは民族学者によって採集された民話、いかに語られていたかという点に焦点があてられる。

たとえば『赤頭巾』という童話がグリム兄弟によって『童話集』におさめられるまでの経緯、そしてそれが実はフランスの口承民話として発生していることが述べられる。しかも、この『赤頭巾』はそもそも赤頭巾をかくってはいなかったこと、そして少女は狼によって、おばあさんの肉と血をだまされて食べさせられ、裸にされ、ベッドに引き込まれ、そしてじぶんも食べられてしまうという何とも卑猥で残酷な話だということ。

しかし、その残酷さや卑猥さもヴェイユというフランス農民の炉辺での夕べの集まりとそのなかで男たちが農具を修繕し、女たちが縫い物をしながら、身振りや擬音を交えて語る情景のなかでは、まったく違った印象のものになるであろうと著者は洞察する。

パリの社交界やサロンのお茶、廷臣の趣味にあわせて作り替えられたり、活字文化の下

い。いやむしろ、いまほどそれが必要なときはないであろう。問題は内容である。

それは運動を一元的に支配しようとするものであってはならない。多様な多様な運動や団体の存在を認め、それらの自立的な連帯をうながすために力となるものでなければならぬ。その意味で、いわゆる「現代思想」から学ぶ点が多いと思う。

もともと、日本で「現代思想」をやっている人たちは、「理論と行動の不一致」が極端なものめずらしい。おたがいのわずかなちがいをつづきまわし、「自分の方が正しい」と声高にののしりあう。「誰それとは同席できない」と言い張ったりする。態度の方はぜんぜん多面的じゃないのである。

どこのつまり、党派である個人であると

を問わず、そしてまた路線や理論の左右を問わず、仲間うちでしか議論のできないのが現代の日本の左翼の特徴となっている。こうした「政治的自閉症」の蔓延こそ、「手遅れ」を象徴する最大の出来事であり、その主体的原因でもあった。

『前衛』の誌面が、そこから脱皮するため

えてみる必要があるだろう。あせつてもしょうがない、どうせ手遅れなんだから。相手に「決め手」がないことでもある。

ただ、誌面刷新に着手するのはできるだけ早い方がいい。こうしている間も「主体の風化」は進行しているのである。

第一章「農民は民話をとおして告げろする」

と

【 16 】 農・漁村人口もへりつづけている。工業製品の輸出のしすぎのツケを「農産物輸入自由化」で払ってきたことの結果でもある。農協関係者がよくいうように、農業保護政策は日本の一専売ではない。にもかかわらず、日本本だけが目の敵にされるのは、農産物の過少輸入ではなく工業製品の過剰輸出に問題の根本があることを示しているのである。

前 評で、またまた第三次産業に人があふれることになる。農業切捨てともない自然破壊もすすむ。公害規制も「緩和」の一途をたどる。

こうして、自動車、電機など一部の「戦略産業」の突出した輸出競争力と外貨を稼ぎ、それで原材料や食糧を輸入するという「再生産構造」ができあがる。膨張しつづける第三次産業は、この過程で流出した「潜在的過剰人口」にたいする「所得の再配分機構」の今日的姿といってもいいすぎではあるまい。

労働者の状態も変わった。労働組合の組織率も三〇%を割った。組織労働者の絶対数はほぼ横ばいなのだが、主婦パートの増加などで雇用労働者の総数がふえたことの影響が大きい。いわゆる本工の比率も低下し、賃金が四〇才を越えたくらいで頭打ちになる傾向も顕著である。終身雇用、年功序列、企業内組合という「三種の神器」を柱とする「日本的経営」に変化がみえはじめているわけだ。

かといって、企業主義的統合力の弛緩を一般的に期待するのは気が早すぎる。もともと大企業に典型的な「三種の神器」は、その外側の、「恩恵」に浴さない中小・未組織労働者の存在を前提にして、はじめて有効に機能するものだった。日本の経営が世間でいわれているようなたんなる「丸抱え方式」だとす

るなら、ここまで強烈なエネルギーを引出さなかったらどう。差別と分断による強力な階級を社会的に形成したからこそ、それはまさに全社会的に普遍的なイデオロギータリエタである。未組織労働者、職場を転々とする若年労働者、あるいは失業者が企業主義イデオロギーと無縁だと考えるのは、あまりにも皮相な観察にすぎない。

したがって、「三種の神器」の「不純化」は、

少なくとも現時点では、労働者の自主性のさらなる解体、資本への流動的隷属の進行となつてあらわれることになる。「大企業本工ですら安泰とはいえない」という、どう喝の効果は大きいのである。あるいは、「中間労働市場」という形で、派遣労働者などを企業グループを単位に統合しようとする動きなども、見落してはならないだろう。

労働組合運動にしても、「未組織の組織化」をかかげた個人加盟の合同労働の運動の方にみるべきものが多いようである。日本の経営の変化が労働者の自主性の回復には直接には結びつかず、意識的な働きかけの媒介を必要とするということであろう。だから、おなじ合同労働運動を自称していても、少数の活動家集団による「内輪の団結」に矮小化していく例も少なからず出てくることになる。

三宅島や逗子の住民運動も注目し値する。自民党支持層をも巻き込んだ運動になつており、それが各種の投票結果にハッキリあらわれているからである。

こうした情勢は、運動や理論、組織のあり方に根本的な転換を要求している。

たとえば、一本の線を引いて敵と味方を区別しようとするようなやり方は通用しなくなる。とくに党派の場合、ささいなちがいを見つけて他党派を批判し、そのことによって自分たちのアイデンティティを守ろうとすることながな本能化しているだけに、注意が肝要である。

多元主義を本気でやってみよう

もともと、「手遅れ」だからといって、「うつつ手がない」ということにはならない。この点は田川自身にも直接確かめたことである。ただ、それを確認するにすぎないとは、運動のすすめ方が決定的にちがって行く。田川もそのことがいいたかったのだといっていた。

そもそも、支配階級がわにも決め手がな

い。「矛盾の内側への押しつけ構造」は当然健在だろうが、「外」の方はそうはいかない。

肥大化した生産力は、アメリカを中心とした世界市場への依存を決定的に深めさせた。だが、さきに農業問題でみたように、このことが日本の対外政策を根底から制約し、したがってまた国内政策の帰趨をも左右することになる。しかもそれは、経済問題にとどまらない。「教科書検定」「靖国公式参拝」に一定の歯止めをかけたのは、韓国や中国による「外圧」の力だった。

もはや国是と化した観のある「行革や企業合理化」にしても、現時点で軌道修正の可能性があるとしたら、それは「外圧」によるものであろう。現に「円高」圧力は、「内需拡大」を

ポーズにせよ、とらざるをえない状況に政府を追い込んでいる。あるいは自動車総連の幹部をして「国際競争力が強すぎて逆に輸出ができなくなるといふんなら、賃金を削ってまで合理化に協力するんじゃないか」といわせている。甘い期待は禁物だが、「内側の構造」にまで影響は始めているのだ。

三〇四議席の余勢をかって中曽根が導入しようとした売上げ税に、ストップをかけているのは保守層内部の造反である。「自民党が大勝すると内部抗争が起ころ」という「法則」の正しさは今度も実証されたことになる。

いずれにしても、野党や労働運動の主体的力量とはべつなところで、劇的な社会的変動が起きつつある。労働問題研究家の松尾忍によれば、労組の手をかりない「一人争議」がふえており、その「勝率」がけっこういいのだという。実際には労政事務所の職員などが相談のりつつ会社との交渉をすすめるケースが多いらしいのだが、どこかの組合を紹介して解決をゆだねるといふ、従来のやり方からみれば大変な様変わりだと思ふ。

あるいは、「全人民的政治闘争」といった基準をあてはめ、諸闘争をランクづけしようとするような態度も一考を要する。ことに、住民運動に「反安保」の立場を要求したり、それがないからといって限界だなどといったがるのは問題であろう。七〇年代以降、各種の運動で党派がすっかり嫌われ者になってしまったのは、かれらのこうしたやり方起因する。実行委員会の場などでえんえんくりひろげられる位置づけ論争も、運動のエネルギーをそく役割しか果していない。

とはいえ、理論活動一般が無用なのではな

〔 18 〕
で変化した物語と、民間伝承とではその精神世界に大きな差異のあることが指摘される。

だがダントンは、この一八世紀のフランス農民の精神世界を開示するという大仕事にかならずしも成功していない。それは、彼が解釈しすぎるからである。フランスの民話の特徴と、その語られる状況が詳細に提示されることによって、我々はその世界と文化を感ぜることが出来る。彼の仕事はこのレベルにおいては十分に成功しているにもかかわらず、それを定義つけたときに、感知された「全体」がこぼれ落ちてしまうのである。しかし彼の方法論は、そうした欠陥を補ってあまりあるほどに刺激的である。

第二章「労働者の反乱」

猫の大虐殺

猫はなぜパリの印刷工たちによって虐殺されたのか。この「猫の大虐殺」こそは、旧制度下の職人文化そのものだったのである。「猫の大虐殺」というのは、一七三〇年代の後半にパリのサン・セヴラン街にある印刷工場で起った滑稽な騒動を、そこで徒弟生活をおくっていたニコラ・コンタという労働者が体験記として残した記録をテキストにしている。

ここで、猫の虐殺に象徴される事象は当時の労働者の生活であり、精神世界である。そしてこの著者はテキストから次のような労働者の姿を読み取るのである。

まず、印刷工という労働者が文字を扱える数少ない職人であったこと。彼らは常時飢えていたこと。自分たち独自の生活・精神文化を形づくっていたこと。

「親方たちは猫を愛している。したがって職人は猫を憎むのだ」、労働者はみな親方に対して同盟を結んでいる。印刷工の間で尊敬されるには、親方の悪口を言いさえすれば十分である。コンタのいくつかの証言から著者は、当時すでに鋭く表われている労働者の抵抗意識を掘り下げていく。「猫の虐殺」が直接的には親方や、猫を好む階級に対する巧妙な抵抗であったこと。さらに、その抵抗の方法が中世から続くさまざまな形の民衆の祝祭的習慣や儀式と結びついた饗宴——一時的反乱の形とながっていることなどを明らかにしていく。そして、次のように推定する。「この悪戯が一定の範囲内に封じ込まれていたことは、旧制度下の労働者の戦闘性に限界のあることを物語っている。印刷工は自分たちの階級よりも職業と一体化していた。彼らは組合を組織し、ストライキを行ない、時には力づくで賃金を増額させたけれども、ブルジョアに隷属している点に変わりはない。ダントンはこのテキストをとおして、当時の労働者——職人の世界を生き生きと再現している。

一八世紀フランスの生態と風景

第三章は冒頭で紹介したような「ブルジョアジー」というものの姿——実像、その精神世界を一七六八年にモンペリエ市の一市民の書いたモンペリエ市についての詳細な「記述」を素材として探究している。「ブルジョアは自分の都市をどのように観察していたか」というもの。

第四章は『作家の身上書類を整理する一瞥

部——フランス文壇の分析——』と題する、一八世紀フランスの知識人——インテリを対象にすえたもので、当時の啓蒙思想の担い手が実は新興のブルジョアジーであるよりはむしろ下層の聖職者におつていたことが明らかにされると同時に当時の知識人というものの社会的な存在形態に言及している。

第五章はデイドロを中心とした『百科全書』派の、哲学を価値の中心に推しあげた戦略的役割の解明を行なう。『知識の系統樹を刈り整える哲学者たち』つまり、事実あるいは事象というものの分類というものが分類的仕方のなかにこそイデオロギーをひそませているというところを、フーコーとはまたちがったかたちで解き明かして見せている。そして『百科全書』派の啓蒙思想のなかでしめる位置をあらためて提起するのである。

第六章「読者がルソーに込める——ロマンティックな多感性の形成——」は、ラ・ロシュエルの一貿易商ジャン・ランソンが本の注文と自分の読書についてのコメントをヌーシヤテルの印刷協会会長オステルバルにあてた書簡を用いて「読書」というもの、また「読書」というものをつうじた伝達方式の時代的位置をほりおこしてみせた。

この著作を一章から六章まで読みとおしてみれば、そこには明らかに一八世紀——大革命前のフランスの風景や人々の姿が浮かび上がってくるようになっていく。一つ一つの章はまた一つ一つの独自の研究としても読み切ることができる。

また、それらのなかで語られていくことは多様に絡みあい、派生し、とらえ難く膨らんでいく。展開の本意を見失わせさえずる。し

かし難しい文章ではない。むしろ平明な文章といえそうである。

それだけに誤解を与えやすくもあるのだろう。「思想」の八六年度第二号の「歴史における文化——シャリバリ・象徴・儀礼」という特集号でフランスの学者三人とダントンの座談会が掲載されているが、そのなかでフランスの学者たちは、この本でダントンがしばしば行なう断定的表現に、疑問をなげかける。例えば第一章で農民の表現にみられる氣質をフランス氣質と結論づけるが、このことにたいして、フランスの側からなげかけられた疑問に対して、ダントン自身もその言葉——フランス氣質——を使ってしまったことに対する弁明を余儀なくされるというわけである。しかし、この座談会においてもダントンの「方法」にたいしての評価はたかい。

もちろん今日では「人類学的方法」というものがあらゆる分野に用いられ、また一種の流行モードとなっている観もあるくらいに、目新しいものではない。また実際に中世の世界に関してはどのように検討された著作が数多くみられる。しかし近代のとはくち辺りの生活・精神文化に関しては、概して我々は近代的価値尺度で推し測ってしまう傾向を免れない。

だがたとえ日本における明治の社会を対象としたとき、もはやわれわれの精神世界とは遠く隔たっている。ダントンのおこなった、自明であると思われるものを今一度「他者」として据え直す方法の意味をあらためてかみしめてみる必要があるのではないだろうか。

表紙のことば

水の隠喩として或る階段を作成する。それは道具として機能することから解放された「階段」として、二次元に構築される。流れる形態、量感、エネルギー、或いは透明感まで、「階段」が平面に浸透する過程で、コンセプトは不可能性を象徴する。不可能性といういわば無限・階段から、自然と近代の図像を解体する現場が見えてくる。

編集 『前衛』編集委員会

発行人 高橋一雄

発行所 現代企画 ☎03-293-8564

東京都千代田区神田神保町1-64

神保町ビル203号 振替東京5-44589

購読料 4100円 (年間㊦共)

5600円 (密封・年間)

定 価 300円